

中世高山城と肝付氏について

中野 翠

一 はじめに

肝属郡高山町の地は、古代後半―中世末期にかけて大隅国から日向国南部にかけての豪族の雄として、島津氏による領国支配が乃ぶまで大隅半島に君臨した肝付氏が歴代本拠地とした所である。その肝付氏が拠点とした高山城は、現在行政的には高山町本城地区に属し、地理的には大隅半島のほぼ中心部に位置し、肝属川下流域南部の国見山系の山々の南西端、すなわち北流する高山川と東より高山川に流入する木佐貫川・本城川の二支流に挟まれて南西方向に延びる丘陵地一帯に展開しており、深い谷や急崖に囲まれた中世の典型的な山城である。高山城址は昭和二〇年二月二二日国の史蹟として指定され今日に至っている。

今回は、去る昭和五四年十二月十五日と五七年十二月八日の二回に亘る高山城址の現地調査を通じて、残されている高山城絵図にも触れながら現況を報告すると共に城の縄張りを明らかにし、併せて、高山城が軍事的拠点として最も整備・補強され活用されたと思われる南北朝―戦国時代を中心に、肝付氏と高山城とのかわりについて文献資料を通じてその経緯を述べ若干の考察を試みてみたい。

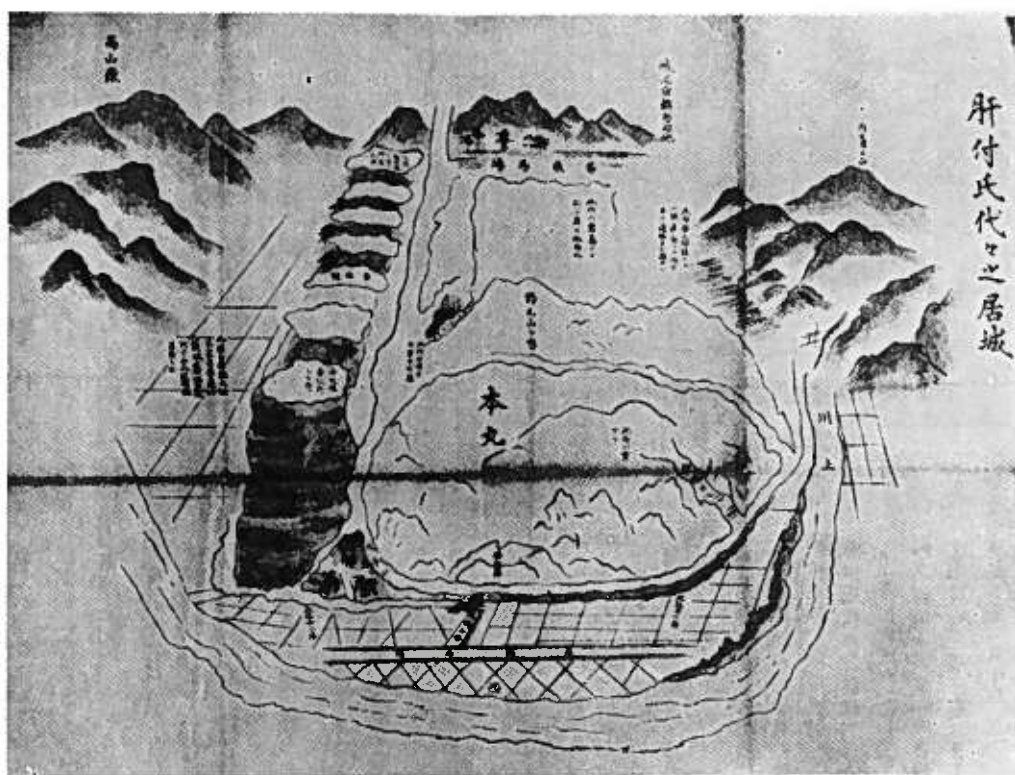
二 高山城遺構

1 高山城の絵図について

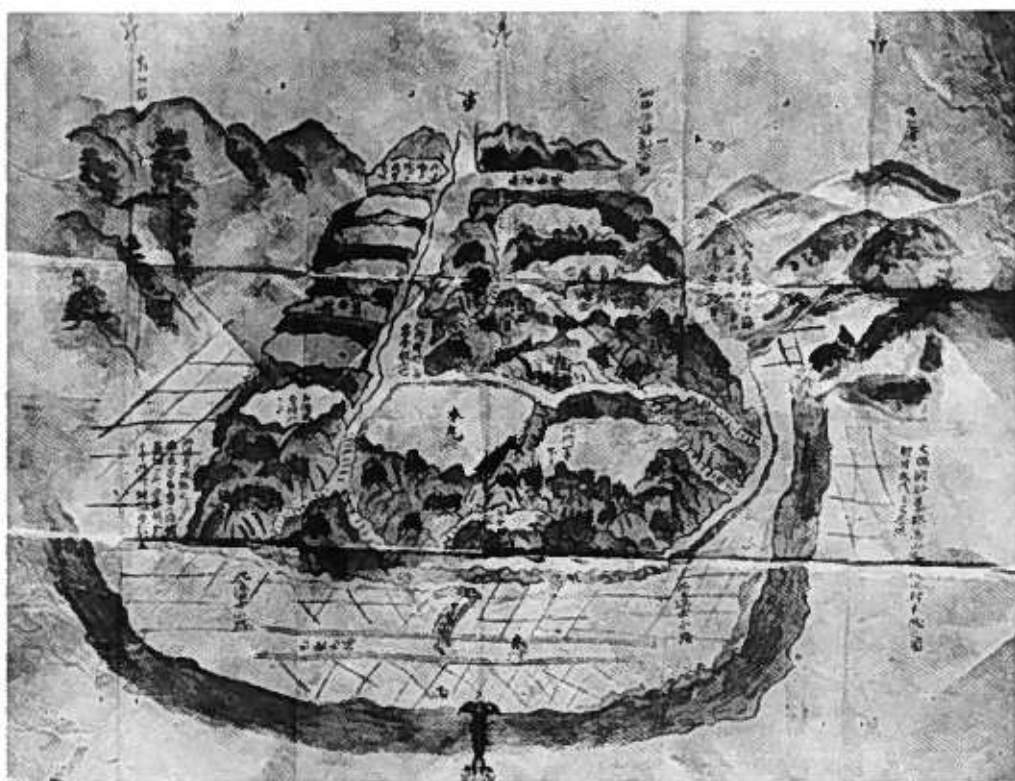
高山城の絵図については、これまで「高山郷土誌」等で紹介されており、幕末の作とされる「肝付氏代々の居城」(図A)がよく知られている。ところで、この絵図とほとんど同じ内容・構成の絵図(図B)を、肝付家の寄託を受けて黎明館のテーマ展示で展示中である。ここではBの絵図を中心にAと比較しながら紹介してみたい。

まず、両絵図とも西側上方から東へ眺めた高山城を中心に、下方は城の手前を流れる本城川、上方は高山嶽(現大聖山か)と内之浦山(現国見山か)までの範囲が鳥瞰図風に淡彩をほどこして描かれ、語句や説明文が記入されている。両絵図の大きな違いは、「本丸」付近の描き方で、Aは全体的に粗雑であるのに対し、Bは非常に詳しく描いてあることである。その他、絵図の見出し(タイトル)文及びその位置、語句の表現や説明文の行数、語句の天地の記しかた等に若干の違いが見られる。

次に、Bについてその他の概要を述べてみたい。材質は和紙で一部虫食いが見られるが保存状況は良い。大きさは五六cm×七六cmで、左端下方に黒印が押してあり、折りたたんで保管するよう右上隅と左下隅の裏



A 肝付氏代々之居城



B 大隅国肝属郡高山之内後田村本城之図 肝付氏代々之居城

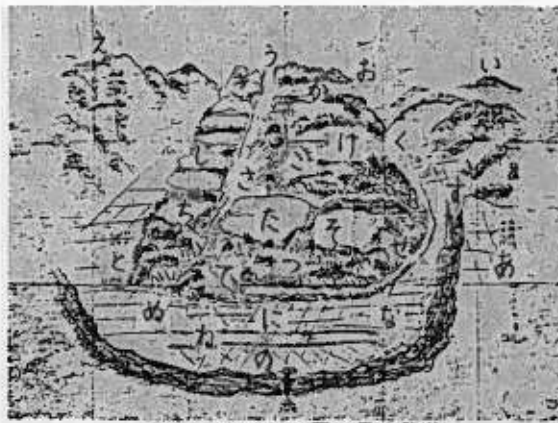
側に青色の厚紙の表・裏表紙(二〇〇×十三〇)が貼付されている。また、この絵図を保管するため紙こよりの紐付き和紙封筒(写真1)が大小二個あり、表にはいずれも「大隅国肝属郡高山本城之図」、その左側下方に「肝属氏」と記してある。作者は不明だが、作成年代はAの年代からして幕末前後のことと思われるが、全体的にBが詳しく描いてあることからしてAより後の作成の可能性が強いのではなからうか。

以上のことからして、A・Bとも高山城廃城後三百年余りに作られたものであり、作成時点ですでに曖昧な所があるが、それでも高山城が機能している時代の資料が残っていないだけに、中世高山城の実態を浮きぼりにするための貴重な研究資料である。

なお、Bに記されている説明文や語句は次の通りである。

〔注〕出だしの記号は絵図上の記載場所を表し、()内はAの表現「」、又はA・Bの相違点等である。

- あ 大隅国肝属郡高山之内後田村本城之図
- 肝付氏代々之居城 (A ↓「肝付氏代々之居城」)
- い 内之浦山 (A ↓「内之浦之山」) う 東 (B ↓天地が逆 (A ↓なし))



絵図記載文の位置を示す記号

- え 高山嶽 お 城之後部而田地 (B ↓天地が逆、A ↓「后」(後))
- か 馬乗馬場 (B ↓南北方向に縦書、A ↓横書)
- き 此辺檢井ト云所有之由 (A ↓「云フ」(云))
- く 此所岩之切抜ニテ、一騎通之由ニテ内浦江通堀之小路有り
- け 此所二重壘ニテ別テ広キ地面也 (B ↓4行、A ↓2行)
- こ 鶴丸山ト云 (B ↓2行、A ↓1行、A ↓「云フ」)
- さ 此所舁形之由当分杉山也 (A ↓「舁形」(舁形)) し 奥曲輪
- す 川上 せ 堀手口 そ 此所一重下り た 本丸
- ち 山伏城 看経所トモ云 (A ↓「云フ」) つ 茶釜跡
- て 大手口 と 此辺自「球麻之相良家」在番之諸將籠城之所也是故ニ到ニ
- な 干し今「此辺」ヲ球麻屋敷ト云 (B ↓4行、A ↓5行、訓点や送り仮名なし)
- ぬ 此辺士小路
- ね 馬乗馬場 (B ↓南北方向に縦書、A ↓横書)
- の 西

2 高山城址の現況

高山川に架かる本城橋東側水田に「史跡肝付城」の標柱(写真1)が建っているが、ここから東側にかけての丘陵地一帯が高山城址である。律令制時代の大隅国府(現国分市府中の地)とは大部離れているが、柳井谷に通ずる間道を通ると肝属川河口の波見の港と



1 絵図保管用の封筒



C 高山城付近 (明治29年鹿児島県管内全図より)

連絡できるなど、大隅半島を掌握するには好位置を占めている。(図C) 高山城は、高山本城・肝付城・山之城などとも呼ばれ、肝付氏が大隅半島の覇者たらんとして領域支配を進める過程で、交通の要衝や領域境に多数の支城を設けたり他氏の山城を吸収するなどして、最盛時の肝付氏は高山・吾平から志布志・松山に渡る広汎な地域を領域としている。支城として具体的には、大平城・検見崎城・宮下城・富山城・大脇城

(御幣園陣)・弓張城(麓之城)・塚崎城・和田城・波見城・柳谷陣・下し丸陣(求摩陣)・永山陣・宇都陣・堂園陣・合戦田陣(古城)・波見陣(以上高山地区)、末次城・井上城・松下城・筒ヶ迫城(以上吾平地区)、鹿屋城・鹿屋古城・大始良城・高隈城・長谷城(以上鹿屋地区)、加瀬田城・西原城(以上百引地区)、申良城・岡崎城・北原城・岩弘城・下伊倉城・白寒水城・中山城・畑込城・笹塚城(以上申良地区)、大崎城・蓬原城・野御城・胡麻ヶ崎城・龍相城(以上大崎地区)、松尾城(志布志)・志布志城・安桑城・松山城・月野城・朝広城(以上志布志地区)などがあげられている。

肝付氏歴代の本城となった高山城

は、山地から南西方向に延びる丘陵地の付根を掘切りで断ち切り、三方を川乃び急崖で防ぎ、丘陵地のほぼ中央部に東面に細長い通路を掘って通し、左右に郭(曲輪)を配置するという中世山城に特有の縄張りとなっている。城は正面を西に向けており、最高所(約七八m)の本丸を中心として、各々削平面を持つ郭がほぼ南北に配置され、各郭は天然の浸蝕谷や空堀によって分断され独立した郭を形成し、「往時の総城跡は五十余ヘクタールの広さ」であつたとされている。

「史跡肝付城」の標柱が建っている所が城域の西端で、この付近の三つの川に挟まれた標高二〇m前後をなす階段状の水田地域が三の丸跡(写真2)といわれており、その一部をなす馬乗馬場(写真3)の主要部分は東西方向に農道及び田区として残されている。この農道の南側は本城小学校跡で、講堂・消防用車庫・高山城址模型等が残っている。先述した絵図のA・Bによると、三の丸の地は「此辺土小路」と記されており、中世には肝付氏家臣団の屋敷が建ち並び平時における生活の場になつていたものと考えられる。また、A・Bでは「茶釜跡」下方から西へ向けては「弓場地跡」(Aは「弓場小路」)で南北に延びる「馬乗馬場」にはほぼ直角に接するように描かれている。馬乗馬場の方角が現状とくい違っている点に気がかかるが、戦時中の国史跡指定ということもあつて指定当時の資料も残っておらず、また、高山町では耕地整理の際、「三の丸の馬乗馬場は原位置を原形のままに田区を設けて耕地整理後もこれを保存し、本城小学校敷地の後方に東西にのびて昔の面影を偲ばせている」としているので、現時点では現状に従っておきたい。

大手口手前右よりの道を右側へ登りきった二の丸下段にある岩場の下

部に、岩を削って造った湯沸場跡（A・B→茶釜跡）（写真4）がススのついた状態で現存しており、ここから馬乗馬場を見おろすことができ（写真5）。同じく湯沸場近くの二の丸西側下段にも切りたつた岩場があり、何らかの形で活用されそうな場所の感じを受けたがそれを裏づける資料等がない。

城正面の大手口（写真6）をはいって、すぐに左折する北方向への道が大手門跡へ通じている。また、大手口左側（北側）の道をはいつてすぐ左手（西北）への道を少し登ったところに、肝付兼統（一五六六年没）頃の創建とされる大来目神社（写真7）がある。朱の鳥居をくぐると台形状の平地となっており、鳥居横の石段を登りつめた所に城神（写真8）が祭られている。A・Bに記された相良家の武士が在番として詰めた地は大来目神社の地と思われ、戦国期に伊東氏と連係した肝付氏が肥後の相良氏とも一時通じたのかもしれないが、絵図以外にこれを裏づける資料を現時点では見出し得ない。

大来目神社から下って東への登り口にかかり、右手からの大手口の道と合流（写真9）すると、すぐに大手門跡（写真10）に達するが、土中には現在でも門柱の遺構が残されているようである。この大手門から東へ通ずる坂道（写真11）を登り、搦手口からの道と合流した所が城のほぼ中心点となっており、この地点を取りまくようにして標高七〇m前後の削平面を持つ四つの郭があり、高山城の中核を構成している。

まず、大手門前方（東方）にある最高所（標高七八m）の郭が本丸跡（写真12・13）で、南西部に腰郭を有し、五角形に近い削平面は二段から成り、虎口を西側に向けた構えとなっているために下段は二つに分割

されている。削平面は西側を除く縁辺部に幅約二・一・五m、高さ約一・五〜二m（東端部はそれ以上）の土塁をはっきり確認でき、土塁上には相当に成長した木（写真14・15）がおい茂っており、郭の東端と南端は天然の急崖となっている。現在の削平面は杉と雑木草に覆われており土塁以外は一見した程度では確認できなかったが、最も重要となる飲料水は竹樋を使って東方の山から引いていたという話しも伝承されている。

詳しく描いてあるBの絵図と比べてみると、虎口の位置は現況と一致し、削平面は二つに描いた上で下方に「此所二重」と段差のあることを示し、「広キ地面」と補足を加えてあることからして、下方の郭は上段の削平面と下段南側の削平面を併せて示したものと思われる。また、Bで下方の郭に該当する部分は、当時「島」となっており、この状態は終戦直後まで続いたらしい。虎口右側の「鶴丸山」は肝付氏の家紋（立ち向鶴）からついた名称と思われるが、該当するものを見出しがたい。

本丸跡手前の郭が二の丸跡で、東側に腰郭を有し、長方形と正方形の削平面を持つ上下二段から成り虎口を東側に構えている。上下段とも東側及び南側に土塁（写真16）が築かれ、下段南端は急崖である。現在削平面は本丸同様に杉や雑木草に覆われているが、かつては、井戸跡二カ所と建物の礎石があったそうである。Bの絵図に描かれた削平面の形や「此所一重所り」の状況等は現在でも変っていない。但し、A・Bともにこれまで二の丸と称されている地に「本丸」と記してあるのをどう解釈すればよいのであろうか。城の縄張りから判断する限りにおいては、高山町教育委員会のたてた標識や出版物等で紹介してある通りで良いと判断したい。しかし、両郭とも決め手の重要な一つである標高及び削平

面積が似かよっており、外にも枳形に向けての虎口の位置・搦手口（絵図については後述）からの攻防の条件等も似ている。本丸及び二の丸の地や先述した馬乗馬場の地については、今後、新たな史料の発見や発掘による遺構・遺物の調査結果など実証的な裏づけを待つ必要がある。

本丸・二の丸と向い合って枳形と山伏城が配置されている。枳形跡は搦手口を登りきった所へ向けて虎口を構え（写真17）、二段から成る削平面は、上下段ともA・Bの絵図の通り現在も「杉山」で本丸よりの東端に土塁が見られる。枳形手前の郭の削平面はほぼ直角三角形をしており東端に土塁を残している。ここはA・Bの絵図では「山伏城」といわれ、「看経所トモ云」と記されていることから、続経やまじない等にも使用されていたことを推測させる。

本丸・枳形の北側には、ほぼ東西に延びる大きな空堀があり、A・Bの絵図によれば本丸北側の空堀が「馬乗馬場」となっている。空堀の北側も削平面を持つ二つの郭が東西に並んでいる。両郭とも南側（空堀側）に大・小の腰郭を有すると共に上下二段から成る削平面の東北端や東端を中心に土塁（写真18・19）が見られる。A・Bでは枳形東側の郭に「奥曲輪」と記してあり枳形東側に五つの郭を並べてあるが、これは五つの郭の総称とみたい。すなわち、現況の東西二つの郭のうち、西側の郭を上下二段と大腰郭の三つに分けて表し、東側（最奥）の郭を上下二段で表してあるのではなからうか。そうした仮説に基づくと、A・Bが伝聞として伝える「楡井城」とは東側（最奥）の郭にあたる。南北朝初期に南朝方として活躍した肝付兼重と楡井頼仲（兼重没後は肝付秋兼と対立）とのからみからして志布志の頼仲が一時的に高山城に拠ったことは十分

に考えられるが、文献資料等からの裏づけが必要であろう。

搦手口は城の南側を流れる本城川に向けており、本丸と二の丸の間に位置している（写真20）。A・Bの絵図では本城川に向けて二筋の通路を描き、手前の通路を「搦手口」と記してあるが、ここは二の丸南側の急崖（写真21）を岩を切り抜いてつくった「一騎通」しの道を誤ったものであろう。

本丸の東北側にある最奥郭と東へ続く丘陵地との間は、ほぼ南北に向けて掘切りで断ち切っており東方への備えをなしている。

なお、本文中で示した現況写真は、本城小学校跡から見た高山城（写真22）とともに、一括して掲載し略図上に矢印で位置を示した。

調査の前後には先述したA・Bの絵図の外、次の資料も参考とした。

- 「日本城郭大系18」（新人物往来社）所収「高山城要図」（図D）
- 「南九州の城址」（小幡晋著）所収「高山本城見取図」（図E）
- 国土地理院発行二万五千分の一地図（高山城付近）（地図F）
- 航空写真 昭和五〇年撮影（高山城付近） 県庁林産課蔵（写真G）
- 航空写真 昭和五七年撮影（高山城付近） 黎明館蔵（写真H）

以上の参考資料と現地調査結果を加味して作成した高山城址の見取図は別紙のとおりである。時間をかけての実測まで含めた調査でなかっただけに、力量不足からくる判断の誤りも多かったかもしれない。開発により破壊が進む中世山城が多い中で、高山城址は幸いなことに国の史蹟として指定され、地元教育委員会ははじめ関係者の方々の努力のおかげで、削平面はほとんど杉等の植林がなされているが、肝付氏の軍事上の拠点として、拡充された最盛時（戦国時代）の原形をほぼ留めている



G 昭和50年撮影航空写真 高山城跡



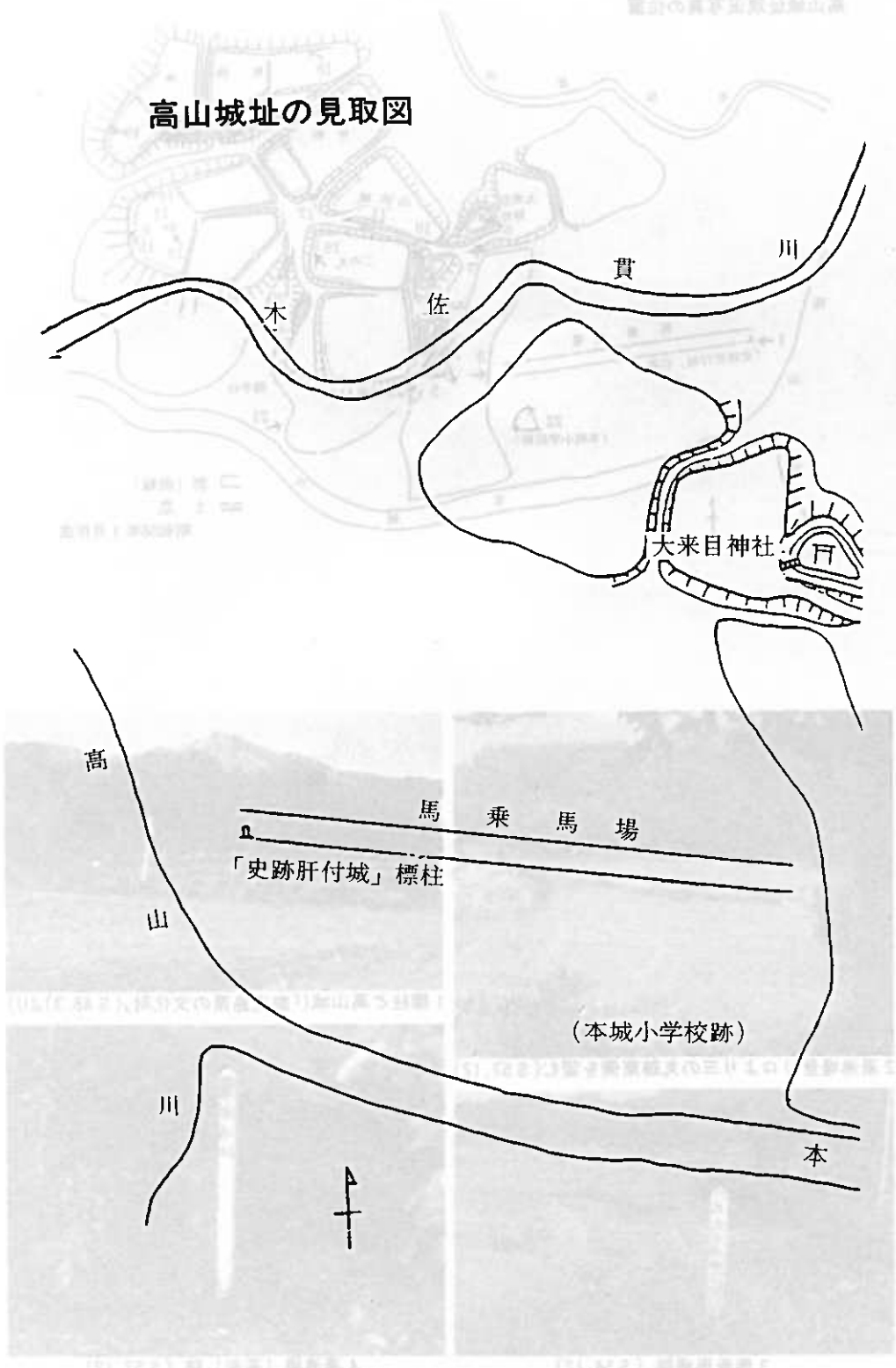
H 昭和57年撮影航空写真 高山城跡



— 郭 (曲輪)
 - - - 土塁

昭和58年1月作成

高山城址の見取図



高山城址現況写真の位置



2 湯沸場登り口より三の丸跡東側を望む (S 57.12)



標柱と高山城(「鹿児島県の文化財」(S 48.3)より)



3 馬乗馬場跡 (S 54.12)



4 湯沸場(茶釜)跡 (S 57.12)



6 大手口 (S 57.12)



5 湯沸場前より馬乗馬場跡を望む (S 54.12)



7 大来目神社登り口、石段上は城神 (S 57.12)



8 城神 (S 57.12)



10 大手門跡



9 大手門跡を望む (S 57.12)



12 本丸跡中心部付近 (S 54.12)



11 二の丸、山伏城間の通路 (S 54.12)



14本丸跡土塁と土塁上の木 (S 54.12)



13本丸跡 (S 57.12)



16二の丸跡土塁 (S 57.12)



15本丸跡土塁 (S 57.12)



18奥曲輪の土塁 (S 57.12)



17枡形への登り口 (S 54.12)



20搦手門跡付近 (S 54.12)



19奥曲輪の土塁 (S 57.12)



21二の丸跡南端 (S 57.12)



22本城小学校跡から見た高山城 (左後方山伏城、中央二の丸上段・右側下段) (S 57.12)

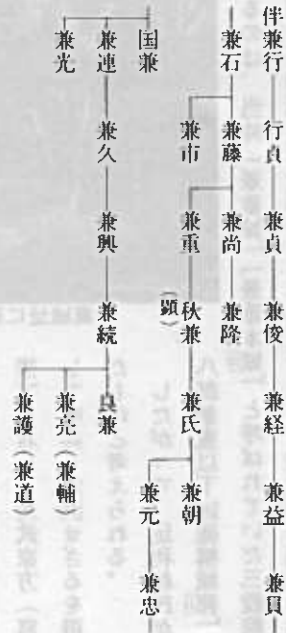
三 肝付氏と高山城の経緯

1 肝付氏と高山移住

伴姓肝付氏の系譜についてはその出自に異説があるが、ここでは薩摩
下向後について扱う。

伴姓肝付氏と鹿児島との関係は、安和六年(九六八)薩摩国総追捕使
となった伴兼行が、翌年鹿児島郡神食に下向したことに始まる。兼行の

肝付氏略系図(鹿児島下向十六世紀末)



孫兼貞は長元九年(一〇三六)九月肝属郡并濟使となって肝属に移り、
その子兼俊が肝付を氏として高山城を代々治所としたという。高山城築
城の時期についても諸説がありその輪郭もはっきりしないが、鎌倉時代
まで一般的に見られる傾向として、地方豪族は居館を大体山麓に構え、
非常時にそのまま城としたり、背後の山を活用したりしているので、肝
付氏の場合も、居館を山麓の本城川べりに構え、あまり手を加えてない

高山城を非常時の備えとしたものと考えられる。

肝付氏は鎌倉幕府成立後も御家人とならず、肝属郡并済使職を基盤として在地領主としての地位を固めつつあったが、鎌倉時代後半になると北条氏一族の地頭名越氏との下地支配をめぐる相論の激化や惣領・庶家の対立などが起こり、地頭の進出阻止と庶家の統制に苦慮している。

2 肝付兼重と当時の山城

鎌倉幕府が倒れ南北両朝による争乱が始まると、肝付兼重が三州の宮方の旗頭的存在として俄に脚光を浴びてくる。

兼重については「兼尚相模鎌倉ニ在リ一女アリテ統ヲ襲ク者ナシ兼尚従父弟肝付八郎兼重家内ニ摂シ封内ヲ治ム此時天下大ニ擾テ王室危シ建武二年十二月兼重後醍醐天皇ノ勅命ヲ奉シテ義兵ヲ挙ク」とか、「日州三股院嶋之口ヲ并領シ自三保八郎ト称ス南朝ニ従テ道鑑公ニ叛ス」と紹介されている。宗家兼尚については肝付氏系図にも「相模国鎌倉住」とあることから、地頭名越氏との相論に関する訴訟で高山を留守にし、弟の兼重に肝属郡并済使職を委ねていたものと考えられる。

日州三股院は平季基が万寿年間（一〇二四―二七）に開いて摂関家に寄進した島津庄の中心地で、三股院領主職は伴氏の一族により代々継承され、兼重は三股を初めて称した叔父兼市の後嗣として三股院に入り三股院領主職を嗣いでいる。兼重は「三保高城ニも住所之様ニ有而、ひと此ハ三股殿と云れ」たように、三股院高城（現宮崎県北諸縣郡高城町大井手）（写真1）をまず本拠地として、三股八郎左衛門尉と称している。鎌倉時代後半肝付氏は地頭名越氏の進出に苦しめられただけに、兼重は



1 高城址に建つ肝付兼重誠忠碑

三股院領主職と肝属郡并済使職という二つの伝統的な権限をもとに二つの地域へと拡大した領内の土地・農民に対する支配権の維持・強化のため、必然的に薩隅守護島津貞久と日向国大将島山直顕に代表される新武家政権（足利尊氏政権）に対し、反武家方（宮方）として挙兵し対決せざるを得なかったものと考えられる。

したがって、足利尊氏が「肝付八郎兼重以下凶徒構城郭」といつているのは、当時「兼重城」「兼重本城」と呼ばれていた三股院の高城や周囲の石山城・王子城のことを指しており、兼重が肝属郡の高山城に腰を据えたのは、日向国大将島山直顕方の軍勢に攻められて、高城が暦応二年（延元四、一三三九）八月二七日落城してから後のことと思われる。その後、兼重は暦応三年（興国元、一三四〇）八月には鹿児島島の東福寺城を攻撃して翌年四月まで立籠ったり、貞和二年（正平元、一三四六）には懐良親王を山川港から海路肥後に送る準備にかかわったり、貞和六年（正平五、一三五〇）四月には楡井頼仲らと島津貞久方にたち向ったりしている様子が窺える。しかし、文和二年（一三三三）の島津氏久注進にかかる大隅国佐殿方凶徒等交名注文には、すでに「肝付八郎兼重今者死法」としており、兼重と高山城とのかわりを具体的に示す史料

を見出し得ない。

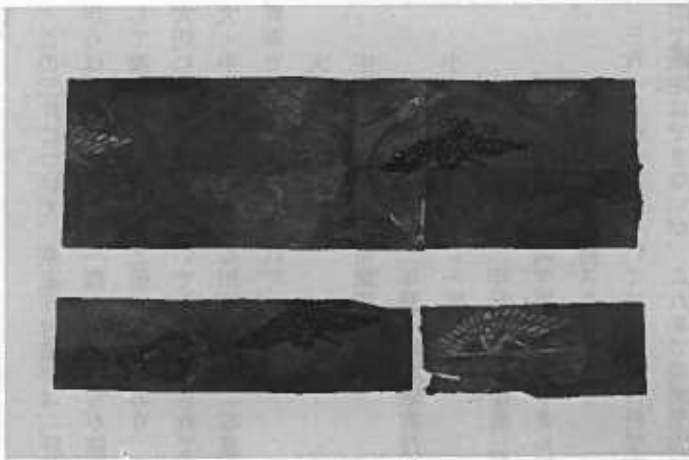
南北朝の山城の具体相を伝える史料は少ないが、その中で建武三年(延元元、一三三六)に兼重の甥肝付兼隆の守る加瀬田城(現輝北町百引平房)を島津貞久方軍勢が攻めた時の軍忠状等が、当時の山城の実態を知る手がかりを与えてくれる。それによると「大手・大手城戸口・水手・搦手水手・野頸、切拂逆木迎・乱杭逆向木、矢種」等の用語が見え、相当地に手を加えた城の縄張りや諸施設・武器の存在が示されている。これらのことからして、南北朝対立及び足利一族の内訌(観応の擾乱)等による戦乱の拡大・長期化に伴って、高山城も兼重が三股院高城から逃れて本拠地とした一三四〇年前後からは恒常的なものとなり、本格的に整備の手が加えられていったものと推測される。

足利尊氏・執事高師直と尊氏の弟直義・養子直冬との対立による武家方の内訌が三州にも影響を及ぼしだと、肝付氏は領主権を維持するためにこれまで敵対した日向守護畠山直顕と観応二年(正平六、一三五二)に和し、武家方の足利直冬方(佐殿方)として、足利尊氏方の島津氏の軍勢と戦い、かつ、楡井頼仲や祢寝氏一族とも戦うという複雑な展開を繰広げている。同年、楡井頼仲の軍勢が支配する弓張城(現高山町)は祢寝氏によって攻め落され、その後は肝付氏の手に戻して高山城の「別堡」となっている。この頃から兼重に替って子の秋(顕)兼が肝付家の惣領として難局に対処したものと思われる。

3 錦旗について―三片の紹介―

南北朝争乱の初期、肝付兼重が賜ったとされる「錦旗」については、

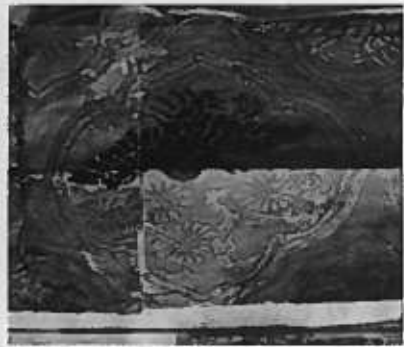
「一件家之旗ハにしきの旗ニ而候、元弘二年ニ大塔宮之御旗を、三股八郎左衛門尉兼重ニ被下候、旗の横広さ三尺三寸、長さ一丈にて候、鳩居二十五尺、旗さは一丈五尺也」とか、「兼重後醍醐天皇ノ勅命ヲ奉シテ義兵を率ク威名大キニ振ヒ向フ所響応セサルハナシ延元二年錦ノ御旗ヲ賜フ兼重粉骨ヲ盡シ」とか、さらには「延元二年征西將軍懐良親王御下向ノ砌リ、兼重殿ハ宮ヲ本城ニ御迎エ奉リ、愈々忠功アリケレバ、錦旗長一丈、幅三尺五寸、旗竿長一丈五尺ヲ賜ハリケル」というように、当



絹製の三片

時のいきさつについては諸説があり未だに定かでない。いきさつに関する考察は次の機会に譲り、ここでは宗家肝付氏が黎明館に寄託されている絹製の三片(写真1)がこれに該当すると考えられるので、その概略を紹介してみたい。

三片の大きさは大片が十二cm×三九・五cm(但し、横へ二五cmの所で二つに切断されたものを和紙で裏打して



2 松に鶴の文様

継いである)、中片が六・三cm×二四・二cm、小片が六・二cm×十五cmで、それぞれ切口は鋏かナイフで切ったような裁断のされ方をしている。布地は絹製(羽二重か)で、茶糸で織り出された木瓜型楕円の囲みの中に下部に松、上部に空を飛ぶ鶴が図案化されて織り出したものが一セット(写真2)となつて、それを



3 三片を保護するための包紙

幾何学的に配置してある。松は金糸・緑糸・茶糸、鶴は金糸・紺糸・茶糸の各三種が使用されているが、各セットとも鶴と松は異なる色の糸で織り出してあり、三片とも大部色が褪せて歳月の長さを感じさせている。但し、紺色で織り出した鶴のみは色も焼けず當時を彷彿させられ

る。

この三片について、宗家肝付家では「肝付兼重方が劣勢にたたされてからは、兼重以下肝付一族の武将たちが錦旗を分かちて、各々お守りとして腹に巻いて戦つたと伝えられており、残存した三片を宗家では代々大切に保存して受け継いできた」とされている。また、三片は一括して大・中・小三種から成る和紙の包紙(写真3)で保護されており、各々異筆で次のように記されている。

大包紙 錦旗
中包紙 後醍醐帝錦旗切

小包紙 錦ノ切レ一片
延元二年夏 肝属兼重持

延元二年肝属八郎兼重三俣院
養兵ヲ揚シ頃被下タル錦ノ御旗ト申
傳所持スルモノナリ

三片の年代判定については、布地の科学的な分析等を済ませていないので断定はできないが、これまでの歴史的いきさつや布地の材質及び金箔を貼った金糸の使用、さらには、大片に裏打してある和紙の古さ等から判断して、「南北朝時代の可能性が強い」と考えられるようである。

4 肝付兼久と高山城

南北朝争乱期をしぶとく生き抜いた肝付氏にも、十五世紀後半になると本拠地の高山城を舞台に内紛が起こっている。

伊地知季安の考証によれば「兼忠長男ヲ左衛門佐国 妻ト云フ父ニ背

ケルトシテ是歳^{甲午}三月一日弟兼連ヨリ攻ラレテ本城ヲ出奔セリ、是ヲ以テ兼連ノ嗣子ニ立テ父子此頃高山本城・富山・野峰・宮下・埤龍沢ナド併領セシニヤ」と、まず文明六年（一四七四）、兄弟の対立があり、弟兼連が高山城の兄国兼を攻めて追放した事を伝え、さらに「兼連ガ子河内守兼久伊マタ垂髪ノ時^{兼久}族臣等叛キテ守護方ニ内応シ郡中イト乱レケレバ文明十九年三月二十六日^{兼久}兼久高山ヲ委テ新納忠武ノ邑ニ出奔セリ、去レド其年ノ九月二十三日忠武遂ニ兼久ヲ本邑ニ復ス」と、兼久の重臣が守護島津忠昌に内応し、文明十九年（一四八七）或いは十五年（一四八三）に、兼久は一時的に高山城を離れ、救仁院を領した志布志城の新納忠武を頼った事を伝えている。

この内粉については、島津忠昌時代の永正三年（一五〇六）、「肝付河内守兼久以高山城叛、（中略）兼久兼連之子也、先是兼連據邑拒命、其弟越前守兼光諫之、弗聽、至是兼久復夕叛」とあることから、守護島津氏の領国に対する勢力拡張策に基づく圧力に対して、兄弟間でその対処法をめぐるの路線の対立に起因しているものと考えられる。その結果、兼忠の次子兼連が長子国兼・三子兼光を押えて島津氏との対決路線も考えるようになり、子の兼久がその姿勢を鮮明に打ち出したことで、ついに島津忠昌も腰をあげ、二回に亘る高山城攻撃に踏み切っている。

最初は明応三年（一四九四）で、島津忠昌方の高山城攻撃に対して、兼久は一家郎徒が結束し昼夜用心して備え、林寝茂清の軍勢等も駆付けて城兵を援けたこともあって島津方を撃退したとされている。

次は永正三年（一五〇六）のことで、その経緯は次のとおりである。
永正三年八月六日島津忠昌当城（高山城―筆者）ヲ拔ムトテ鹿

児島清水城ヲ発シ当城ノ西北柳井谷ニ屯ス当城ト其間深溪ヲ隔テ、五町ナリ城主肝付河内守兼久密ニ志布志城主新納忠武ニ援ヲ乞フ忠武兵ヲ師ヒ不意ニ島津ノ営ヲ襲フ忠昌利アラス同十二日兵ヲ収メテ鹿兒島ニ退ク

すなわち、二回目には島津忠昌自ら兵を率い高山城西北の柳井谷に陣を構えたが、志布志城主新納忠武の急襲を受けると共に、「兼久又撃出シテ來ミ攻」めたために島津方が敗退するという結果に終わった。

この頃から肝付氏をはじめとする有力国衆や島津一門も守護島津家と競合し、三州は下剋上の様相を示し始めている。

5 戦国時代の肝付氏と島津氏

肝付氏が兼興・兼統父子の時代に、三州は戦国時代に突入している。



黎明館寄託資料の「三州割拠」をもとに、戦国時代における肝付氏の領域圏の推移を示すと図1-6のようになる。

まず、兼興は大永四年（一五二四）に櫛間の島津忠朝方の串良城を破り、ついで兼統は、永祿四年（一五六一）に福山廻城の攻防戦で島津方を悩ませて島津忠將を戦死に追い込ませ、翌年には伊東義祐と連合して飢肥の豊州家島津忠親を



3 天文12年（1543）の図



2 天文4年（1535）の図

破るなどして、高山から志布志にかけて一大勢力を築き上げた。さらに兼統は北部への勢力拡大のため志布志を隠居所と定めて移っている。

このように十六世紀半ば前後は、肝付氏にとっては国衆から戦国大名へ飛躍すべく勢力拡張にあたっているため、高山城を舞台としての記録は残されていないようである。一方、守護家の島津氏も、一五五〇年代以降は鹿児島の内城を拠点として本格的に三州統一に乗り出した貴久・義久父子の時代にはいつており、三州の有力国衆に対し硬軟おり混ぜながらの戦略で対処している。戦国時代の肝付氏の場合も守護島津氏及び周辺有力者との間に複雑な婚姻政策（図A）も展開している。

しかしながら、肝付兼統と島津貴久家老伊集院忠朝（孤舟）のかねてからの反目もあり、永禄四年

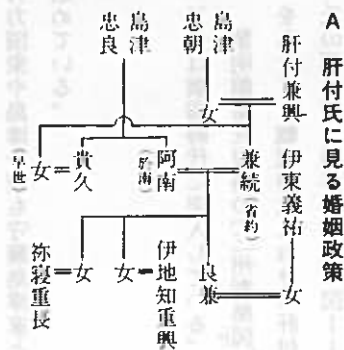


5 永禄10年（1567）の図〈姦刈氏叛す〉



4 天文19年（1550）の図〈貴久鹿児島移住〉

（一五六一）に兼統が鹿児島で貴久を招いて催した宴席上で、伊集院忠朝と兼統家臣薬丸古雲との料理をめぐるやりとりが発端となり、兼統は席をけて高山に引揚げて島津氏と全面对決するに至った。



この間、兼統と貴久の対立を憂慮した貴久の父忠良は「自ら肝付二赴給ヒ月余逗留シテ順逆ヲ説給ヘトモ聞カス」という状態で、むなしく加世田に帰っている。しかし、「梅岳君使人諫兼統」との記



6天正元年(1573)の図(伊知・肝付討伐)

録もあり、忠良自身高山まで行き直接兼統に会って反省を促したかどうかは今一つはつきりしない。島津氏との命運をかけた全面戦争突入直後の永禄五年(一五六二)、肝付兼統・良兼父子は本拠地高山城の別堡である弓張城(麓之城)内の熊野大権現社に「大檀那越伴家前河内守兼統沙弥省約、同良兼」の棟札を奉納しているが、島津氏への戦勝祈願も込められていたものと思われる。

以後、兼統・良兼父子は各地で島津方の軍勢と合戦を続けているが、結末を知ることなく「病死」している。二人の没年については、兼統は一五六六年、すなわち永禄「九年丙寅十一月十五日」に志布志で没し、良兼は「嗣子ナクシテ卒ス」とし、肝付氏系図に「元龜二年辛未七月卅日ニ死去ト見ヘタリ」と一五七一年のこととしている。良兼没年については他説もあるが、「元龜二年十二月申良宮貫社上梁文書日主君肝付三郎四郎伴兼亮」とあり、一五七一年十二月段階では、肝付家の惣領は良兼の弟兼亮(兼輔)に替っていると見た方が妥当と思われる。

6 高山城廃城と戦国時代合戦の一具体相

肝付兼統・良兼父子没後の肝付方は、天正元年(一五七三)正月に末

吉住吉原で北郷時久に敗れ、二月には盟友の祢喜院領主祢喜重長が島津義久に降伏、翌天正二年(一五七四)正月には牛根城を義久武將の新納忠元に抜かれ、二月にはこれも盟友の垂水領主伊地知重興が降伏して孤立したため、兼亮は伊集院忠棟あての起請文を出し、市成・廻を献上して義久に降伏した。しかし、兼亮は伊東氏を頼って出奔したため、老臣等が養子に出していた兼護(兼道)を呼び戻して家督を継がせ、天正三年(一五七五)十一月に再度義久に降伏している。

翌天正四年(一五七六)八月、義久が自ら出軍した伊東方の高原城攻めには、兼護も肝属郡の兵三百余騎を率いて参加したが、戦いを観望して疑われたために再度軍勢を率いて飢肥をめざし、十一月に伊東方と南郷で戦い薬丸古雲等二百余人の戦死者を出して大敗した。そして、「天正五年の春命ありて、兼護には高山の一邑のミを封せられ」、肝属郡内の始良・大始良・内之浦・串良・北原・狩野屋(鹿屋)・百引・平房及び郡外の松山・大崎・志布志・福島をことごとく没収された。義久は直ちに串良院岡崎名上園之門について二月二十七日付の坪付を添えて興福寺に寄進するなど、すばやく寺社対策も行っている。

続いて天正八年(一五八〇)、兼護は日置郡阿多に移されて十二町の所領を与えられることとなり、肝付氏は肝属郡内から全く勢力を失うと共に高山城との関係にも終止符が打たれた。そして、義久の家老伊集院忠棟が「天正年中高山鹿屋ノ地頭トナリテ鹿屋ニ居住」し、高山を管理することとなった。天正八年八月の肥後相良攻めの陣立によると、伊集院忠棟は「高山地頭家老」の肩書きで大守義久の本陣詰めとして名を連ねている。

なお、永禄九年（一五六六）に島津氏の攻撃を受けて高山城が落城した話⁵⁹も残されてはいるが、これほどの大きな事件であれば、勝者側の島津氏や家臣団の諸史料に記録されないことは考えられないし、前述した経過をたどったと見るべきであろう。

戦国時代にはいつてからの高山城での合戦や城の整備・拡大を示す記録は見あたらないが、肝付氏が係った合戦の記録の中に乏しいながらも散見できる合戦の模様を抽出してみたい。まず、先述した永禄四年（一五六一）の廻城の攻防戦では、肝付方が「野類二門ヲ設ケテカタクコレヲ守⁶⁰」ったこと。天正二年（一五七四）の牛根城をめぐる一連の攻防戦では、島津方が義久の作った「狂歌ヲ出シ矢ニ属シテ城中ニ射サシ」めたことや、島津方が「城ノ岸ヲ掘ルコト急⁶¹」であったのに対し、肝付方の「城兵矢石ヲ発シ火ヲ枯竹草藁ニツツミテ地ク⁶²」という応戦をしたが、島津方の新納「忠元ノ兵屑トモセズニ昼夜ヲヘテ城中ニ掘入⁶³」り肝付方を降伏させたこと。さらには、牛根城を奪われた肝付方が島津家久の守る早崎首に対し、山背の樵り道から夜襲をかけて、さかんに「矢砲ヲ発ツ」たので島津方は不意をつかれて混乱し多数の死傷者を出したことなど、当時の肝付方と島津方の合戦における戦術や武器の一端を窺うことができる。

ところで、日本史上戦国時代から築城法や戦術に大変革をもたらした鉄砲（種子島銃）は三州でどのように活用されたのであろうか。島津氏が天文二三年（一五五四）に岩剣城合戦で使用したことはよく知られているが、記録から見ると天文十八年（一五四九）に黒川崎（現加治木町日木山）で、肝付氏・蒲生氏・渋谷氏から成る肝付方と島津方との合戦

が初見のようである。この時は肝付方が「発鉄砲（中略）驚人之耳目⁶⁴」かせて島津方が苦戦している。ここに見える肝付氏とは、十五世紀後半に宗家と対立した兼光（注（30）参照）の系統のことで宗家ではない。初見記録からして十六世紀半ば、島津氏の三州平定までの間に、宗家肝付氏など有力国衆たちが、その規模や組織は別としても、鉄砲を使用したことは十分考えられるが今回は究明できなかった。

7 まとめにかえて

南北朝時代以降、肝属郡を中心として大隅半島に領主制を展開する肝付氏に対して、島津氏はさんざんに手をやいてきた。ところが、薩州家実久との争いに打ち勝ち宗家を継いだ貴久及び子の義久の時代にはいると、島津氏は蒲生氏、菱刈氏、渋谷一族、杉慶氏、伊地知氏、肝付氏、伊東氏など三州の有力国衆を次々と屈服させ、四分の一世紀ほどの期間で三州を平定し、戦国大名に成長した。ここでは、勝者島津氏の戦国期における政策をフィルターとして、改めて肝付氏を見直してみることでもとめにかえたい。

戦国期の島津氏に見られる最大の特徴は、三州を統治するという積極的な姿勢にあったと思われる。まず、貴久が一宇治城から鹿児島へ進出するにあたって、勝久までの居城である清水城にはいらず、天文十九年（一五五〇）に内城をつくってそこを拠点としたこと。これは群雄割拠中の時勢であるだけに、守り中心の山城から脱脚し攻めへの姿勢に転じたことを表している。次に、貴久、義久時代、島津氏は合戦後、相手方所領の大かたを直轄地とし、有力家臣を地頭として城砦に派遣すると共

に、直臣を大量に召移し、地頭の指揮下で直轄地の経営や有事の際の軍
 事力となる衆中身分を創出して、地頭と衆中という家臣団を創設したこ
 と。これにより島津氏は、家臣団を内にあつては自由に統制し外に對し
 ては強力な軍事力となし得た。また、島津氏のみではないが、薩・在家
 に依存していた農業生産方式から、水田耕作を中心とする農民を門とし
 て組織し生産力の向上に努めたことなど、いわゆる富国強兵を推進する
 体制づくりを、忠良、貴久、義久・義弘兄弟等が結束して押し進めなが
 ら三州平定をめざした所に、戦国大名へ急成長し得た原因の根幹があつ
 たものと考えられる。その外、島津氏が近衛家とのパイプを通して、中
 央との人的・文化的交流や情報収集を行ったことも他の有力国衆に見ら
 れない特色の一つである。

一方、戦国時代にかけての肝付氏については、家臣団の統制や在地支
 配に関する具体相は把握できないので、あくまでも推測の域を出ないが、
 戦国期にはいつてからも歴代当主が高山城拠点主義をとつたことなど旧
 来の支配体制を脱皮できなかったことや一族の結束が乱れたことなどに
 より、歴然とした力関係の差が生じたものと思われる。

島津氏は、薩隅の有力国衆の中でも特に最後まで抵抗した肝付氏に対
 しては、降伏後ほどなくして高山以外の所領没収、ついで阿多へ移封さ
 せて在地支配の関係を完全に絶ち切り、最後に阿多十二町も没収して領
 主としての身分を剥奪するという巧妙な方法で対処したのであった。近
 世の肝付氏は、百石―二百石余の城下士として鹿児島に居住した。

また、近世の高山郷は、弓張城下に地頭飯屋が設置され、麓集落や野
 町が形成されたことにより、高山城は「今其遺墟ト唱へ新留村ニアリ、

其辺リヲ本城ト云ヘルト云⁽⁸⁾」という状態になってしまった。まさに、島
 津氏が中世から近世への時勢の流れに素早く対処したのに対し、島津氏
 より古くからの在地性を誇つた肝付氏はこの流れに対応できずに、自滅
 への道を選択してしまつたといえよう。

注

- (1) 肝付氏新系図(宗家)等は大友皇子、新編肝属氏系譜(伊地知季安著)は
 大伴宿弥を祖とするなど。
- (2) 現鹿児島市伊敷町。南日本出版文化協会発行「三國名勝図会」(以下
 「三國名勝図会」という)巻之六(上巻九六頁)妙谷寺鳥瞰図にも「伴
 氏館址」と記入されている。
- (3) 「三國名勝図会」巻之四十八(下巻八八頁) なお、このことにつ
 いては「西藩野史」「薩隅日地理纂考」「本藩人物誌」「鹿児島県史別巻」
 等くい違が見られ未だはつきりしない。
- (4) 「高山郷土誌」一一四頁に三國名勝図会等を引用した紹介がある。
- (5) 五味克夫「鎌倉時代の肝付郡と肝付氏」(「高山郷土誌」所収)
- (6) 鹿児島県教育会発行「薩隅日地理纂考」全(以下「薩隅日地理纂考」
 と言う)二十三之巻(五六八頁)
- (7) 新薩藩叢書(「西藩野史」(以下「西藩野史」と言う)巻之三(八三
 頁)
- (8) 五味克夫「島津庄日向方三侯院と伴氏」(「鹿児島中世史研究会報」
 32号所収)
- (9) 鹿児島県史料集Ⅵ「山田聖栄自記」(五九頁)
- (10) 山口準正「前期室町幕府による日向国「料国」化」(同著「中世九州
 の政治社会構造」第三部所収)
- (11) 「鹿児島県史料旧記雑録前編」(以下「旧記雑録云々」と言う)一
 八〇四(六五五頁)

- (12) 【旧記雑録前編二】二一四〇(七四六頁)
- (13) 【旧記雑録前編二】二〇六二(七二五頁)
- (14) 兼重の脱出のようすについては、五味克夫氏が「日向国那珂郡司について—郡司文書・系図の紹介—」(『豊日史学』一三三号所収)で、下部盛連軍忠状を取り上げ、八月十七日夜密かに脱出して野尻城に拠つたことを紹介されている。
- (15) 【旧記雑録前編二】二一一一—二一一五(七三七—七三九頁)
- (16) 【旧記雑録前編二】二二二〇、二二二一(七六六頁)
- (17) 【旧記雑録前編二】二二二一—二二二六(七九四頁)、【西藩野史】卷之三(九一頁)
- (18) 【旧記雑録前編二】二四九九(八四三頁)
- (19) 【旧記雑録前編二】一八五二、一八五六、一八五七、一八五八、一八六〇、一八六二、一八六五(六六六—六七〇頁)など。
- (20) 【旧記雑録前編二】二三四一(八〇五頁)
- (21) 【三国名勝図会】卷之四十八(下巻八九頁)、【薩隅日地理纂考】二十三之卷(五七〇頁)
- (22) 【旧記雑録前編二】一八九六(六八〇頁)
- (23) 【薩隅日地理纂考】二十三之卷(五六八頁)、【三国名勝図会】卷之四十八(下巻八八頁)にも同内容の表現がしてある。
- (24) 【旧県社四十九所神社旧記】(『高山郷土誌』二六頁でも紹介)
- (25) 昭和五年二月、当主肝付兼冬氏(五六年九月御逝去)から筆者が直接伺った話しの概要。
- (26) 黎明館専門委員坂元盛愛氏によれば、少なくとも三〇〇年以上を経ているとの所感。(昭和五九年二月)
- (27) 前出坂元盛愛氏の所感。(前同)
- (28) 鹿児島県史料Ⅱ「管窺愚考・雲遊雑記伝」(以下「管窺愚考・雲遊雑記伝」と言う)(一一三頁)
- (29) 鹿児島県地方史学会発行「島津国史」(以下「島津国史」と言う)巻之十二(九七頁)

- (30) この内紛後、大崎城主兼光は島津氏に妥協し、子の兼固は溝辺に移り、孫の兼演は一時島津氏と対立するが、天文末期の和議成立後は加治木領主となり、曾孫兼盛の二代に亘って島津家の家老を務め、その子孫は近世には喜入郷の領主となって、代々島津家の重臣として重きをなし、喜入肝付氏と称されている。家紋は、宗家の立ち向鶴紋に対し、鶴丸紋を使用している。
- (31) 【旧記雑録前編二】一七三〇、一七三一(五六五・五六七頁)
- (32) 【薩隅日地理纂考】二十三之卷(五七〇頁)
- (33) 【西藩野史】卷之八(二五八頁)
- (34) 鹿児島市教育会発行「薩藩沿革地図」と同内容の資料である。
- (35) 【旧記雑録前編二】一九九四、一九九七(六四八・六四九頁)
- (36) 【旧記雑録後編二】一六四—一八四(八五—九七頁)
- (37) 【島津国史】卷之十七(二二〇頁)
- (38) 【三国名勝図会】卷之四十八(下巻八四頁) 年代は諸説がある。
- (39) 【管窺愚考・雲遊雑記伝】(一一三頁)
- (40) 【旧記雑録後編二】一六四(八五頁)、【管窺愚考・雲遊雑記伝】(一一三頁)、「島津国史」卷之十七(二一九頁)、「西藩野史」卷之十二(九九頁)など。
- (41) 鹿児島県史料集Ⅱ「本藩人物誌」(以下「本藩人物誌」と言う)(二四〇頁)
- (42) 【島津国史】卷之十七(二一九頁)
- (43) 【三国名勝図会】卷之四十八(下巻八四頁)
- (44) 【管窺愚考・雲遊雑記伝】(一一四頁)
- (45) 【本藩人物誌】(二四〇頁)
- (46) 島津貴久もこの年六月三〇日に病没している。
- (47) 【管窺愚考・雲遊雑記伝】(一一四頁)
- (48) 【管窺愚考・雲遊雑記伝】(一一四頁)
- (49) 【旧記雑録後編二】七四六(三四一頁)
- (50) 【旧記雑録後編二】七四六(三四一頁)
- (51) 【管窺愚考・雲遊雑記伝】(一一四頁)
- (52) 【旧記雑録後編二】八七六、九〇一(四九六—四九七、五〇七—五

